

---

# 今日から新生活

NAO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日から新生活

### 【Nコード】

N5243A

### 【作者名】

NAO

### 【あらすじ】

七年間付き合った恋人との別れ。七年という年月の終りに、いったいなにを思うのか…

## （前書き）

共同企画小説『新生活』。共同制作参加の先生方の作品は、『企画小説新生活』で検索すると見れます。

私、中宮真琴<sup>なかつまこと</sup>は、正直荷物をまとめるといふ作業は、あまり得意じゃない。

ダンボールの中に部屋の荷物を詰め込んでいる合間にも、私の集中力は、片付けとは別の方向に流れていく。

私が手に取ったのは、一枚の写真。

「まだ、片付かないの？」

私の背後から、この部屋の持ち主、金城雄介<sup>きんじょうすけ</sup>が声をかけてきた。段ボール箱と向かい合う私の肩越しから、手元をのぞいてくる。

「考えると爪を噛む癖、いい加減に直せよ」

親指の爪を噛みながら、苦々しい気分になる。

「別にいいじゃない。今日には出て行くんだし」

「そうだけどな…」

爪を噛むのを止めて、私が強い口調で文句を言つと、彼はとたんに語尾を濁した。

考えると爪を噛む癖は、子供のころからずっと続いてきたものだ。無意識のうちに、私は親指の爪を噛んでしまう。考え込んだとき、暇なとき、テレビを見ているとき。気がつくと私は親指の爪を噛んでいる。上あごの前歯と下あごの前歯で挟み込んで、爪の硬質な感触を味わっている。味のないガムをかんでいるような感覚。でもガムよりはずっと硬くて、それでいて壊れにくい。例えば、プラスチックを噛んでいるような食感に似ている。

いや、味わっているというのは語弊がある。私は決して爪が好物なのではない。

言うなれば、タバコと同じなのだ。吸っていないと、どうしても吸いたくなってしまう。口寂しくなってきた、口にタバコをくわえなくなってくる。いつの間にか手にはライターが握られていて、慣れた作業で火をつける。

弁解のように聞こえるかもしれないが、私にとって爪を噛むという癖は、それぐらい常習的な行為なのだ。雄介がタバコを吸い続けるように。

「あと、これ。歯ブラシ、シャンプー、ボディソープ」

右手一本で、その三つを器用に持ってきた雄介。左手はタバコ専用で、いつも空手だ。私と話している合間にも、左手は口元にくわえたタバコの灰を落とす、一連の動作に使用されている。

「…ありがと。でも、歯ブラシはいらないわ。捨てて。他のは持つて行くから」

「わかった」

ダンボールの横にシャンプーとボディソープを置いて、私に背中を向ける。

「雄介はいい加減、タバコ止めたら？」

「…お前が爪を噛むのを止めたら止める」

「雄介がタバコを止めたなら、私だって爪を噛むの止めるわよ」

雲行きが怪しくなってくる。胸中に立ち込める暗雲。私はそれを払いのけたくて仕方がない衝動を何とか押さえ込むと、再びダンボールに向かい合う。

一枚の写真は、まだ私の手の中にある。

付き合い始めてからすぐに撮った写真。

雄介の誕生日に贈ったデジタルカメラで撮影したもので、不慣れなせいでタイマー機能が使いこなせず、撮るのに苦戦した思い出がある。時間設定をどうやって変更するかが出来ずに、たった五秒間で撮らなければならなかったから、慌ててフレームの中に入ってくる雄介に押されて、私は前のめりになったり、フレームアウトしてしまったり。

結局十枚以上撮り直し、満足がいかないままプリントアウトした結果、出来上がった写真。

最近のデジタルカメラの画素数は良すぎて、細かい肌のきめまで写真として出てしまうのが厄介だった。

それ以来、私をデジタルカメラで撮ることは禁止している。

…でも、雄介と別れることが決定的、絶対的となった今では、カメラで撮るも撮られるも、どうでもいいことだ。

「また、爪噛んでるぞ」

右手に生理用品と、コップ、目覚まし時計をまとめて持ってきた雄介が、無意識のうちに爪を噛んでしまっていた私の上げ足を取る。左手はやはり空手。タバコの煙を吸い込んで、左手でタバコのフィルタ部分を持ち、煙を吐きだす。

左手は、タバコ専用。タバコ以外の何物にも優先させない。

「ふざけないでよ」

雄介のデリカシーのなさ、もはや愛嬌ではなくなっている。付き合い始めた当初こそ、野性的とか、前向きな方向で考えられただけ、同棲し始めた直後には、それはただの悪所にか見えなくなった。

雄介の癖に我慢できなくなった私は、それを口に出すようになり、最初は優しく諭すようだったのが、年月を経て乱暴な言葉となり、最後には喧嘩腰になった。

それは雄介も同様だった。

爪を噛む癖を黙認してきた雄介も、段階を追って喧嘩腰になった。爪を噛むときに発生する、歯と歯のかち合う音が気になって仕方がないらしい。

そんなことを言ったら、お風呂に入りながら歯磨きをするのも雄介には止めて欲しい。

足の爪を切るとき、切った爪をテーブルの上に集めるのも止めて欲しい。鑑賞会じゃないんだから。

トイレだってそう。便座はきちんと下ろしてからトイレを出て欲しい。次の人のためを考えて欲しい。汚したら、きちんと拭くのだってそう。なんで、私が雄介のトイレの後始末をしなければならぬのか。トイレトーパーで拭き取ればすむだけのことなのに。他人のトイレの後始末をしている自分自身を思うと、私は空しくな

ってくる。仕方ないな、と思って拭いてあげたのは最初だけ。

外から帰ってきて、所かまわず靴下を脱ぎっぱなしにするのも止めて欲しい。洗濯籠に入れてと何度も言った。でも、雄介はそれを聞いてくれない。テレビを見ながら背後に放り投げ、私は顔面に雄介の靴下を当てられた。

それが、私の長年の怒りを爆発させた。

こんな男とは、別れてやる。

「真琴、茶碗と箸」

私に差し出す。タバコは吸い終わったのか、口にはくわえていなかった。

「真琴？ …泣いてるのか？」

「泣いてなんかないわよ」

七年…七年間だ。青春を捧げたといっているいい七年間。それがもうすぐ終わろうとしている。がさつで、ずばらな雄介に振り回された七年間だ。何度尻拭いをしただろう、嫌な思いをさせられただろう。同棲の甘さなんて、三ヶ月で消え去った。それからは、ただの嫌悪との戦いだ。

相手の悪いところばかりがクローズアップされて。

一度気にすると、頭から離れなくなつて。

それは雄介も同じで。私の悪いところばかりを指摘して。

付き合い始める前後は、あんなにお互いを褒め合ったのに、称え合ったのに。

「…悪かったよ。俺が悪かった」

タバコ専用の左手で私の涙を拭う。

「止めてよ、優しくしないで。タバコの臭いは好きじゃないって、いつも言ってるじゃない！」

「…そうかよ」

優しくする必要なんかない。

私たちはもう恋人ではないのだから。友達から恋人へ。恋人からは他人にしかねない。だから、私たちは、もう馴れ合う必要なん

てない。

「夕方には戻るから、それまでには出て行ってくれ。それと、合鍵は、鍵をかけたらポストにでも入れておいて」

雄介は背中を向けて外へ出て行ってしまった。ドアの閉まる大きな音が、雄介の怒りを露にした。

大量の荷物を車に積み込んだ私は、バックを抱えて、今、雄介のアパートのドアの前にいる。鍵を閉めて、ポストに合鍵を入れれば、七年間の同棲生活は終わり。缶ジュースでも買つかのような単純さで、物事は終わってしまう。淡泊すぎる気もするが、逆に淡泊なほうがいいような気もした。

「きつと、この七年間は私の身になってる」

誰かのために尽くした七年間。自分の悪所を思う存分指摘された七年間。馴れ合いの七年間。

物事はたいいてい一人でこなせるようになったし、誰かの世話だつて十分に出来るだけの力もついた。

なにより、雄介に散々指摘された悪い所を直す機会を得たと思えば、このうえのない転機に思える。

「雄介、私…行くね」

鍵を閉めて、ポストに合鍵を投入すると、私は通いなれた雄介のアパートを後にする。

足取りは決して軽くない。

でも、私はそれを引きずっても歩かなければならない。

重りを背負って、引きずって。

それが私の足腰を、心を強くする。

やがて、その重りが軽く思えるときが来て、そして、最後に重さを感じなくなったとき。

そのときこそ、新しい私の始まりなんだ。

「ん…ん」



太陽の真下で伸びをする。燦燦と照らす太陽は、私の体を暖かくしてくれる。固まった筋肉をほぐしてくれて、体を動きやすくしてくれる。

「絶好の引越し日和」

私の新生活は、こうして始まった。

## （後書き）

興味を持って下さったかた、読んでくださったかた、ありがとうございます。引越のため、インターネットを使うことが出来なくなり、しばらくは携帯でしか作品を投稿できなくなってしまうました。そんな作者ですがこれからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5243a/>

---

今日から新生活

2010年10月8日15時20分発行